

---

# リリカル転生記

高町 N A O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル転生記

### 【Zコード】

Z30400

### 【作者名】

高町 NAO

### 【あらすじ】

転生……

そんなもんないと思つてたんだけどな……

それでも、頑張つてみるか。

感想お待ちします！

前作終わっていないのに投稿  
こちらも宜しくお願いします。

目の前に迫ったトラックを見つめながら俺は時間が遅くなつたよう  
に感じた。

今までの思い出が頭の中を流れ、ガシャンッ、と大きな音を立てて俺に衝突する。

衝撃で道路を一回一回と回転し道路脇の電柱に衝突して回転が止まる。

よく即死じやなかつたな

周りの人が騒いでいるのに場違いなことを考えているが、体に力が入らないことから危険なことは……いや、もう長くないだろう。

何でこんな……って考へてゐる暇もなさうだな

最後に思い浮かぶのはただ一人の家族

—— めん かあさん 先に どうぞ んの 所に 」

その言葉を最後に、意識を手放した……

「あつても元気な赤ちゃんですよ、ワシト。」

「とつても元気な赤ちゃんですよ、ワシト。」

「一体全体どうなつちまつたんだ、俺?と云つておつきかひやなこ  
眠気が……ダメだ……眠い……」

「不意に田が覚めると病院独特の薬品の匂いが鼻についた。  
俺は助かったのか……?」

「でもあの怪我だぞ、へたすりや即死つてレベルじゃ無いだろ……」

「それに田の前がうまく開かない、なんも見えやしねえ

「そんなことを考えていたらドアの開く音と人が入つてくる配、そ  
して俺の近くで会話しだす。」

赤ちゃん?...名前?...なに書つてんだ、この人たち.....

「ここの子の名前は、ナオト=ヴァンクル。私たちの名前をもじって  
みたんだが.....。」

あんたらの名前だとか知らん!...俺にはーーーって名前が.....

「ええ、いい名前だわ。これからよろしくねナオト」

反論してやりたいのに声が出ない.....それに眠氣もピークで.....  
もー無理.....

そして俺はまた意識を手放すのだった.....

と、昔のことを思い出しながら積み木遊びをする俺 - ナオト=ヴァンクルーも4歳になりました。

初めは何がなんだかわからなかつた俺だが少し周りを観察していくよーく理解した。

体が動かないのは怪我のせいだと思っていたが、周りで会話する男  
今の父さんーと女 今の母さんーの会話の内容に、魔導師、魔法、  
騎士などの言葉が出たのをきいて

この人たちイイ大人なのにかわいそうな人たちだな…つか、人の病  
室でそんな会話しないでくれよ……

とか思っていたのだが、自身の体を確認しようとして絶句した……

手……小さくね……て言つた俺が小さくね……

なにこれっ？ありえないんですけどー！？…………気がついたら体が縮  
んでしまっていた的な

体は子供、頭脳は大人、その名は名探せ、つて現実逃避しとる場合

か!?

「あいつとあなたのよつな騎士になれますよ」

「ああ、コウトモ! 一歳になつて、もつ話し始めたしこれから楽しみだよ」

ええ、と女人が返した

なんてこつた……」れつて……

……思い返すは高校時代の友達

転生だー何だ騒いでいたのを鼻で笑つてやつて、

「ねーよ(笑)」

と断言したが……『めん権田藁くん、転生、あつた……

……といつわけだ。……誰に説明してんだ?……俺?

とまあ俺のことは……

ちなみに新しい母さん一積み木で遊ぶ俺をみて笑っているーの名前  
はナルミ=ヴァンクル。

綺麗なおねーちゃんだなー、とか思つてこれまで4年間……話を聞く  
と今年で30歳になるらしい

ありえないだろ、見た田高校生なんすけど……

つか家の父さんも今年で32歳だそつだがこちりも若い……

ちなみに母さんは専業主婦、父さんは時空管理局の執務官とか言  
う公務員さんーしかもヒーロー職業 だそつだ

そしてこの世界、なんと魔法があるやつな

はじめは疑っていた俺だが父さんに

「ヤーラナオト、たかいたかーい」

といわれながら上空500mまで連れて行かれたときはさすがに信じた

そしてもう一人

「ただいま、親父、お袋。」

「お帰りコウト。さて、お兄ちゃんも帰ってきたから、飯にしましょうね」

外で遊んできた兄　コウト＝ヴァンクル、この兄貴はなんでもかなりの早熟児らしく一歳には会話ができるようになっていたらしいが、俺はこの兄貴が苦手だ

その理由は……

母さんが買い物について兄貴に俺をまかせたとき、俺の部屋に一人で来て独り言を言い始めたり、ときどきブツブツと意味不明な単語リリなのだ、ハーレームだのーを

「フヒフヒ

とか笑いながら呟いたりするんだよこの子、あの時は心から引いた  
ね……

普段はわりとまともだがな、たまに変なんだよ……家の兄貴……

でも6歳で魔法がAランク? はずこいらしく世間では天才扱いだし、別に嫌いじゃないが、一回もった不信感はなかなかぬぐえないって言うか……

そんな感じの俺の家族だ

まだまだ不安はあるがこれからがんばって生きて生きたいと思つ……

がんばれといいな

## Episode 1

「ちやんとよけろーー！ナオトーー！」

「ふざけんな！？現役 A A A + の執務官の全力の弾幕避けれる奴の  
ほうがすくねーんだよーー！くそクロノーー！」

「まだ本気ではないんだが……」

「マジかよーー？」

「何でこりんな」とこ

あれから5年が経ち俺 ナオト=ヴァンクルーは9歳になりました。

この馬鹿上司 クロノ=ハラオウンーにおもひきシバカレーマス  
……。

こんなスバルタ野郎との再会と重いのが…………まず…………

ナオト6歳 訓練校

「おや、君はー?」

いきなり全身黒ずくめの男の子に話しかけられた

といつかどうかで見たよつな…………?

「君はワシントン・クルーカーの息子さんではないか？」

あつ！

「確かにリングハイ提督の息子さん……クルトさん？」

「違う！？僕の名前はクロノだ！！」

あー、たしかそんな名前だったよ。うな……

「しかし二つの間にか大きくなつて。」

「君は小さいままだね（笑）」

「よし模擬戦だ、本気で相手してやる」

つてな感じでキレさせたのが出会い……

いやいや、あの時の俺は若かつたねえ。なんせ難関の執務間試験2回で合格とかする化け物に当時魔導師ランクBの俺がケンカ売れたよ……結果？

開始5秒でノックアウトされましたよ。

無理だから、開始早々ステインガーレイEXなんたらかんたら展開してバインドで縛つてスフィアを一斉射撃で……そのさき? 気づいたら訓練校の医務室でしたよ……

「よそ見せずに集中しろーーー。」

「だーーー!? もう限界だよーークロノーーー！」

「せっかく長期任務で新人のお前を鍛えているんだ。レアスキルなしで僕に勝つてみろ」

「勝つとは何してんだよーーー？」

ちなみに向でこんなことになつてゐるのかと言ひながら

ナオト 8歳 訓練校

「兄貴は執務官試験落ちたりし。」

「一度や二度で受かるほど簡単じゃないからな。」

「一回三回かかるやつが何言ひたの……」

テーブルを挟んでクロッホ回りで並ぶ

内容は兄貴の試験のことと俺の進路のこと

「まあ、ゴウトのことは置いとこ……お前まだいるんだ？」

「俺？特に決めてないけど。」

卒業間際でまだ就職先が決まってない俺、いや誘いは何件も来てるんだよ、これでも魔導師ランクAだから。まだ決めてないだけで

……

「单刀直入に言おう。ナオト、うちの艦にこないか？」

「アースラにか！？そりゃありがたいがどうして？」

目の前に置かれたカップに口をつけ一息置いてからクロノは

「僕の意思じゃない、だが母さんがな……」

「リンクディ総督が？そりゃまた何でよ？」

「クロノもそろそろ補佐をつけても良いのでは?」と言われて、消去法でお前となつたわけだ。」

「なんとはた迷惑な……。て言つた兄貴に頼めよ。執務官補佐つて試験でかなり優遇されんだろ? それに兄貴のランクはAAA、俺なんかより適任だろ?」

しかしそう言つとクロノには珍しく苦い顔で

「僕はコウトのことがあまり好ましく思えないから君に頼んだんだ、頼むアースラに来てくれないか」

とやここまで言われて俺は首を縦に振った。

んでアースラ、クロノの補佐官となつたわけだ。

ちなみにこの話 アースラに誘われた事とクロノの補佐官になること を家族にしたら、父さんは

「がんばれよ、補佐といつても仕事内容は執務面とせじて変わらんからな。」

と激励とアドバイスを、母さんは

「あらあら、ナオくんもエリート街道まっしぐらね　おうちも安泰だわあ　」

と少しづれた発言を、まだ軌道に乗っていないので安泰ではないのです、母さん……

そして……、兄貴はどういと……

「なんで俺じゃなくてお前ー? もうヒクロノの高感度上げとくんだったーーー!」

そしてこつものブツブツモードへと突入した

んで、無事に訓練校を卒業した俺は晴れてクロノの補佐官、アースラの乗務員?になつたわけだが……

今回の初航海が始まり館長のリンディ提督、アースラのオペレーター陣、武装隊に挨拶を済ませ仕事に取り掛かろうとしてクロノに声をかけられ

「ナオト模擬戦するぞ。稽古つけてやる。」

といわれ訓練校で凹られたことを思い出し、やんわりと断つたがアッサリ理論（ロゲンカ）で負け、今の状況……

「そり仕上げだ!!」

クロノがそう言つとナオトの体にスカイブルーのバインドが絡みつく

「ハベセ・?」

そしてクロノの足元にミッドチルダ式の魔方陣が展開され

「アビラン canon V-」

トリガーワードを叫び、ブレイズカノンを放つクロノ

そして何とか避けようとするものも、バインディングがかかるてこるの思い出し

「二つあるあるー!?ー!ー!」

あえなくノックダウンされるのだった……

リリカル転生記 Episode 1

ノックダウンされ目を覚ました後、俺はアースラのブリッジに来て  
いた。

「なんすか……俺、体痛くて仕事したくないんですけど……」

「いや……そこまではしないと思つただが……」

俺の言葉にクロノが返す、正直死ぬかと思つたよー。.

非殺傷設定でも痛いもんは痛いんだかんな、このやつーーー。

「クロノ君の訓練はきつこつて武装隊の人たちも言つてるからね」

「HIMIYちゃん、もつと言つてやつてくださいーーー。」

クロノとの会話にて、いすに座つたまま顔を向けずにオペレーターのエイミィ＝リミヒタさんが笑いながら言つ。その言葉に周りにいた武装隊の人達はウンウンと頷いていたりする。

「HIMIY……、ナオトはJのへりこ君がないと成長しないと思つただが……」

クロノよ……、それで俺がお亡くなりになつても良いのか……？

主に精神的なほうで……

そんな会話をしていると

「みんな、本局からの依頼が入ったわ。準備して。」

艦長のリンディさんが声をかける。それにクロノがどのような依頼なのかを尋ねると、なんでもロストロギアクラスの魔力反応が無人（文化レベル〇）の世界から確認されたらしい。

その調査、確認、確保が今回の依頼らしい。ってか……

「アースラ着任後の初任務がロストロギアの回収とか……」

難易度高くないか……、まあ俺が担当になるわけ無いから大丈

「先発隊にはクロノと補佐官のナオトくんに行つてもりづわね。」

ちよつ……？

「了解です。」

クロノも「了解とか言つてんじゃねーよー？」

ちょっと俺の実力を思つ出して、クロノ、

封印魔法…………適正ほほ無し、簡易の封印魔法のみ使用可能。

—

訓練校でこのデータが出たときは一田中へこんでたなあ

だって封印だぜ！　俺だってカッケー封印の呪文とかいつてみた  
かったんだよ……（泣）

そんな俺がロストロギア系統の、しかも海が受け持つような代物相  
手じやまつたくの役立たずじゃないですか？　と確認するとリンクデ  
イさんが

「執務官になるための訓練だと思つて

……………だそつだ。

リンティさん……俺、……別に執務官になりたくて、クロノの補佐官をやつてるわけではないのですが…………

ひと咄つかクロノ！？「愁傷様」……、みたいな視線くれやがつて！  
！ある意味お前の責任だかんな！？……………1割くらー…………

……………後でハイミィさんに、この間本局で女性の管理局員に囲まれてアタフタしてた写真わたしてやる…………

せいぜい弄られろ……………ちくしょう（泣）

「本当にこんな所にロストロギアがあるのか？」ソリウムで偉い学者の

調べでも昔から文化レベルのなんだろ?」

うつそうと生い茂る草木を搔き分け進んでいて、ふと疑問に思ったことをクロノに聞いてみた。ロストロギアは失われた文明の遺産で、以前文明があつた形跡のありそつな世界での発見率は全体の99%だ。

「だからこそ、だ。文化レベルが以前から無い所でのロストロギア反応、学者の説が間違っているか、あるいは……」

そこ今まで言つて言葉を止め、起動状態のS2Hで田の前を指す

「誰かしらがいる可能性だ。」

そこには明らかに気味の悪い笑顔を浮かべ、手には台座に刺さつたままの神々しい剣を握った赤いコートをきた男が立っていた。

て言つか……

「笑った顔、気持ち悪い……てか、どんだけニヤケ顔……」

「言つてやるな……、さすがに可哀相だ……」

クロノも同じことを考えていたらしい。

俺ヤダよー?あんなのに話しかけるのなんて……

どうする?という視線をクロノに送ると、君が話しかける。という  
思念がきた!?

マジですか!? 無理だから!? 女の人が真正面からあのニヤケ顔  
みたらトライアスマになるぞ、あれ!?

えつ?上官命令?ふざけんな断れなくなつたじやねーか!?

クロノ、覚えてるよ……、と思念を送り……俺はその男に声をかけた

「時空管理局の者です。なにをしていらっしゃるのですか?」

男は驚き急いで手を振り返ったが

汗つ！？汗飛んでるから！？

そして氣味の悪い顔を歪め

「げっ！？管理局、何でこの場所に！？今からこのカリバーンを抜いて真のオリ主になり、リリな世界でフラグ乱立させようとしてたのに！？」

えつと

なにこいつ

「うなつたら、このカリバーンでお前を倒してやる！！」

僕のこの剣で……とか言って引き抜こうとする男……

……つてまずいつ！？あれ十中八九ロストロギア、つかカリバーン  
てアーサー王の聖剣でしょ！？使われるのは不味いつて！！？

クロノも突然のこととで対処が遅れ反応できていない…………！？

あの男が剣をぬき……

剣を……ぬき……

「なんで僕の剣が抜けないんだ！？」

キモイ男、剣抜けず……

うわっハズツ……俺だったら高層ビルの屋上から飛び降り自殺するくらい恥ずかしい……

キショ男も、なんでだ！？ 選ばれた僕ちゃんなら聖剣も抜けるはずなのに！？

とか言つてた。おいクロノ、発見してすぐに不審者発見とか報告するな……

変態で十分だ！！ 不審者に失礼だろ！！…………何が違うんだ？

そんな状況の中急に男が何かに気づいたような顔をして

「 そりゃ、他に人がいるからだめなんだ！ 選ばれた人間が武器を取るときはたいてい一人だから！」

なんかブツブツ言つてるよ……

あれっ？ かなりやばい事言つてるよな！？

「 ナオト！？ 避けろ！？」

クロノの言葉で反射的に体をひいた。

その直後、先ほどまで俺の体があつた場所を斬撃が通り過ぎる

あつぶねえ……クロノが居なかつたらやばかったな……

「大丈夫か？ナオト！？」

「なんとかな……。それよりアイツ、おそらくAAAクラスはあるかもな……」

クロノも、そのようだな。と言つてるし間違いないかもな……

それにしても、何だあのデバイス？　と言つがデバイスなのか？

男の手に握られた二対の白と黒の短剣

「…………どつかで見たぞ？」

たしか友達（前世）の政義くんが騒いでた Fate なんたらかんたら、とか言つゲームのビジュアルブックで観たな、たしか

「干将・莫耶……中国の名剣かよー!？」

小さな声で囁き、

ある意味ロストロギアだろ。ってか、使い手の顔つてあんなんじゃなかつたよつな？

「ナオト、僕に作戦がある。よく聴け……」

！？…………確かに今の状況なら最善だろ、なら

「3・2・1でいくぜ、クロノ。」

「任せとけ。そっちもしくじるなよ。」

静かになつた俺たちを見て赤いコートの男は語りだした。

「なんだい、僕の力にビビッて動けないのかい？今すぐここを去るなら心優しい僕『ウザイんだよ、アホ！』」ふざや……

クロノとタイミングを合わせて男にSUSUで一撃を加える。

SUSUは俺の使っているデバイスで元は管理局員始めたばかりの親父のデバイスだったのを俺が受け継いだものだ。

俺が一撃を加えた後クロノがディレイドバインドを設置した場所へぶつとばす

その結果……

「あつけなく捕まつたよ、このアホ男……

傍らでクロノが報告中、俺はこいつの見張り。

それでも……

「この剣で何なんだろ？本当にカリバーン？てかエクスカリバー？」

「僕の剣だ！…さわるな…！」

バインドに縛られた男が叫ぶがこの剣はいずれ管理局で管理されるか、保護といつ名田で放置されるかだ。

ロストロギアを管理するといつても時には関わってはいけないものもあるらしい。

下つ端の俺にはわかんないことだけね。

「…ひなつたらこの転移装置で…！」

やべつ！？ こいつ！？ほつといいたらバインド解除してら……  
俺のうつかりさん（笑）

……じゃねえよ！？ 早く捕まえないと、こんな男を現代社会に出

したらそれこそ犯罪だ！！

「つー？ 大人しくしろよーー。」

「僕に触るなーー。」

取り押さえようとしたら、男に魔力弾でぶつ飛ばされた。

こいつー？ どんだけ馬鹿魔力だよ！？

剣の刺さった岩の方にぶつ飛ばされながら感じた魔力量でさっきは力を隠していたようだ。

やべーーー ぶつかるーー？

ゆっくりと剣のほうに向かい……俺のSHI-1のデバイスコアが剣の宝石にぶつかった瞬間

♪マスター認証。マスターが危機的状態のため魔力の開放を開始します。  
^

「」の言葉とともに剣が光始め、強烈な光と膨大な魔力が流れ出した。

あれっ！？ 僕まずいんじゃね？

明らかに次元震が起「」り始めている中で意識が朦朧としながら考えていた

「僕のカリバーンが！？」

「おいいいい！？ まずは俺の心配してくんない！？ そ「」の男！」

「ナオト！？ 手をつかめ！？」

クロノが手を伸ばす

さすが俺の上司！？ 伸ばした手を掴……めずに落ちていく……

「手え短いんじゃボケヒヒヒー！？」

「君の手が短いんだね！？！って、ナオト！？」

言ご合つてこる最中も虚数空間に落ちてこく

くせつ、じとな事言いたくねえけど……

「クロノ！ 早くあの男捕まえてアースラに戻れ！ ！」

それとな、と笑つて

「みんなよろしく。」

その言葉を最後に俺は意識を手放し、虚数空間に落ちてこつた。

episode 2

「オオオオオオオ

なんだれりきから……ビュービュー五月蠅い、それになんか寒い。

虚数空間の中つて寒いのか？

ひとつひとつ田を開けて自分の状態を確認すると

「なんか落下してるんですけどおおおーー？」

俺、虚数空間に落ちたはずだよなー！？なんで空から地面へ向けて落  
下してんだ俺ええー！？

>それはマスターの魔力が足りず、私の内包魔力を使用したために  
術式が不安定になってしまったため次元震クラスの虚数空間を通し

ての転移をおこなつたからです。^

「せうなんですか？」

^セウなんですか。^

つて」とはやつぱりあの剣はロストロギア、それもかなり危険度の高い代物だったわけか……

ああ……、またクロノに怒られそつな氣がする。帰れたらだけど……

^マスター、地上まであと1000メートル切りました。^

「よし。じゃあ飛行魔法を展開しセ……

……俺、さつから誰と会話してゐるんだ……？

♪マスター、どうかしましたか？♪

「ＳＵＩ－がしゃべったあああ！？」

なんで！？ ＳＵＩ－はストレージデバイスだったよ！？ まさか父さんの匕つ切り……なわけあるかあああ！！ この９年間みてきたけどここまで露骨なドッキリする人じゃねえよ！－

♪早く飛行魔法を展開しないとまずいかと。のじつ500メートル♪

ＳＵＩ－に言われて我に返り飛行魔法を展開しようとして違和感を感じた。

ＳＵＩ－に魔力が通りにくく！？

ストレージデバイスの特徴の処理速度の速さが若干鈍い。他の人は意識しないと感じないくらいの違和感だが、長年相棒として使用してきたナオトには感覚の手に取るようにならなかった。

^ の辺り 200 メートル。落下地点付近に高魔力発生体と民間人を  
1名確認。^

つて、今は気にしてゐる場合じゃねえだろ！－！

つか今気づいたけど魔力ほとんど残つてねえよ俺！？

しかも目を凝らしてみると民間人（俺と同じ年くらいの女の子）に  
高魔力体（黒い物体）が襲い掛かるうとしているし！？

…………まずこの状況をどうにかするのが先だな

俺はなげなしの魔力を飛行魔法の展開に注ぎ込みそして

> A c c e l F i n <

アクセルフィンを展開するも

「展開遅かつたあああ！！！」

ドガアアアアン！－

「二やああー？なんか落ちてきたのー？」

黒い物体に突っ込みましたよ、こんチクショオおおー？

「うう……、あれ? ここは?」

たしか上空からパラシュート無しのスカイダイビングして、黒いや  
つに直撃して……

体が痛いけど、周りは静かだ。

「わっか……今までのが夢だったんだ……」

たぶんクロノの訓練の時に撃墜されてからずっと寝てたんだよ（・。・）キリ

「ヒローが喋るとか……インテリジションストバイスは憧れるナビ  
やー、どんなだけ己の欲望丸出しの夢だよなあ、まつたく。」

どうかしましたかマスター？

「ウフーオ……」

夢じゃないんですね……

「えっ！？それじゃわっかの女の子はー？」

周りを見渡すと、公園の中のベンチに寝かされていたみたいだな  
あの子がはこんでくれたのか？

「あつ、気がついたみたい」

「あつーーわっかの女の子ーー！」

「えつと……はー、これーー！」

女の子は可愛らじいウサギ柄のハンカチを差し出して

「お顔が汚れてるから、これで拭いたらいいの」

「あっ、ありがとう

なにこの子、メチャクチャ優しいんだけど！－

俺の人生（前世も込み）でも五本指に入る優しい子！

つて、あれ？

「さっきのが夢じゃないならモジヤモジヤの魔力体は！？」

「あれなら、彼女が封印しましたよ。」

俺の問いに答えたのは小さなイタチの様な生き物だった。つてイタチ！？

「イタチが喋った！？」

「イタチじゃない、フェレットだ！－ちゃんとユーノ・スクライア  
つて名前もあるんだけど。」

喋るフェレット？のユーノか……

話には聞いたことはあったけど喋る動物を見るのははじめてだな……

……………ん？

「ユーノとやら、先程言った言葉をもつかい言つてくれない。」

「イタチじや」

「そのまえーー。」

俺の聞き間違いじやないだろつか、いやそりだ……やうに決まつて  
るーー。

「彼女が封印しましたよ。ですか？」

「えつ！？封印しちゃいけなかつたの？」

訳がわからない様子のユーノと驚いた顔をしてる女子。

「えつと……、ビリかの部隊で訓練とかうけたのか？」

首をかしげながら女の子は

「訓練つて兵隊さんとかの？」

「彼女は魔法を使つのは初めてですよ。」

まじかよ……

訓練をうけた武装隊の奴等でも、あの魔力体クラスの敵になるとこ

「するんだぞ！！

それを今日初めて魔法を使う子が封印しちゃったとな！？

「あなたは優しい人ランキングから削除されました。」

「よくわからないけど、すげくバカにされた気がするの……」

「それで貴方はやはり魔法が存在する世界の人ですか？」

俺の呟きから少しだけ沈黙があつてからユーノが改めて俺に聞いてきた。

「そう言えば自己紹介もしてなかつたな。ナオト・ヴァンクル 9歳、巡航船アースラに所属。一応、執務官補佐です。」

かつこよく言つてみたけど、執務官補佐にはなつたばかりで実際の現場に入ったのはこの間の事件だけどね～…………  
つか思い出したらあの赤マントに腹がたつてきた！！

「執務官補佐ですか！？良かつたこれで管理局に連絡がとれますね

！」

「良かつたね、ユーノくん」

(。口。)

そりじやん、クロノに連絡とらないと…！  
あ～、でも連絡とれても第一声は説教なんだろうな…  
でも背に腹はか)e

マスター

「さすがに、もう驚かないからな……。……なんすか？」

私のなかに存在するメモリーには管理局という組織、その他のご友人の連絡先のデータは存在しません。

はつ？

「そんなわけ無いだろー？冗談だよな？冗談ですよね？冗談と言つてください……」

私がマスターに冗談を言つたとしても得はありません。事実です。

なん、だと……

ズシャ

「膝から崩れ落ちたの！？」

「顔から生気がまったく感じられないんだけど！？」

「じめん、取り乱して……

あんまりな状態に取り乱してしまった俺。  
しうがないでしょ！？

あるはずのアドレスが消えてんのよ！？ もつマスオさんもバック  
りだわ！？  
ええー……

「えっと、私たちも自己紹介してもいいかな？」

「あつうん。」

俺が正気に戻るまで待ってくれたのね。

「私が、高町なのは 小学三年生です。家族とか仲のいい友達はな  
のはって呼ぶの」

「さつきも言つたけど、僕はユーノ・スクライア。スクライアは部  
族名だから。ユーノが名前です。」

女の子の方がなのはで、フェレットがユーノね。

「それなら、さつきの出来事とその経緯をおしえてくれないかな?」

なるほどね。

ユーノの部族が発見したロストロギア（ジュエルシード）を運んで  
いる途中に事故が起きてロストロギアがこの世界に散らばってしま

つたらしく。

そのロストロゴニアが思念体の様なものになつたものがモジヤモジヤだそな。

ちなみにこのジュノルシードとやら、元々は生物の願いを叶えるもので、宝石のような見た目をしてゐるとか。

「……あれか、ラゴンール的なあれだな七個そりうど願いが叶うと……」

「ドランールが何だかわからないけど、ナオト思つてるようなものではないよ……数も21個だし。一回収できたんだけど……」

「…

「えつ違うの。つてか21個!? ロストロゴニアが21個だとおもん!?

どんだけ紛失してんの!?

ロストロゴニアは単体でも取り扱いが危険で十分に管理されないと暴走するんだぞ!?

「…………おいおい、勘弁してくれよ。」

「りや帰る前に大仕事和しなきやない気がするぞ。

「本題じいめんなさー……。僕のせいだ……」

あつ……しまつた。俺言ひ過ぎたかな……

「口が悪い事と一言めこのを直せ。」

つてクロノに耳にタコが出来るほど罵られてたのにな……

「いや、俺の口が悪いのはこいつもの事だからさ。ユーノ!めん!ー!ー!

「うそ、でもナオトやなのはさんを結果的に巻き込んでしまつたし。

「

と言つてひつむくユーノ。

そんなに責任を感じなくともなあ。

俺なんて宿題が出来なかつたのクロノのせいにして逃げたこともあ  
るからね。

……結果、ばれてクロノにボコボコにされるわ、宿題増えるわ  
で、関係ないな。うん。

つまりはユーノが一人で責任を追わなくて良いくことなんだが。

そんなこと思つてると、なのはがクスッと笑つて

「えつと、たぶん、私へいき。あつ、ユーノ君もナオト君も怪我  
してるしこじゅ落ち着かないよね。とりあえず私の家に行きまし

「 ょう

確かに落下したときの衝撃で体の節々は痛いし、治癒魔法は苦手なうえに魔力もほとんど残つてないし。なのはの家に行くのが……つて！？」

「俺が行つても大丈夫なのか？」

いきなりお友達だから今日泊めて、となのはも親には言えないだろうし……

「…………ああ！？」

今気づいたのね……

「とつ取りあえず、お父さんやお母さんに聞いてみるの……」

焦りを浮かべたのはと、じりじりと尋ねてくる。

わりと絵になつてるし。

まだまだ神様は、俺を休ませてはくれそうにないな……

いつも休みをくれない上司の顔を浮かばせながら、俺は一人と夜の公園をなのはの家に向かつて歩いて行くのだった。

## episode 2 (後書き)

かなり更新出来なくてすいませんでした。  
いろいろ立て込んでまして。

○○フリーダムさん。遅くなってすいませんーー！

m ( ) m

## episode 3

「 よくも、なのはをこんな時間まで連れまわしてくれたな。 覚悟は出来てるか？」

「 ほんとうにすいませんでしたあああーーー。」

開口一番に土下座します。

えつー？ なんで土下座してんのかって？

それはだな

.....  
.....  
.....

公園での会話の後、三人？でなのはの家に向かつた。

「 それにしても、ユーノの部族って有名なのか？」

「 管理世界ではかなり有名なほうだと思つけど.....。 と言つかナオトはスクライアのことを知らないの、補佐官なのに。」

疑惑の目を俺に向けてくるユーノ。

ああ、そのことか

「俺つてば訓練校時代は戦つ」としか考えてなかつたんだわ。」

あの頃はとにかく現場で使えそうな魔法調べてばっかだつたしなあ。

「それじゃ補佐官は大変なんじゃない?」

「ああ、今の上司に毎日勉強させられてる……休憩時間に。」

クロノのやつ

「時間がもつたいない。休憩時間にやるが。」

とか言い出すもんだから、俺の休憩時間は補佐官になつてから一度もありません。

「ナオト君お疲れ様なの。」

そんな優しさが嬉しいよ、なのは。

クロノにもそのくらい優しさがあつたらよかつたのに……

ん?仕事といえば

「なのはの両親は何の仕事してんの?」

「あつー!僕も気になるー!」

「うんとね、家は家族で喫茶店をしてるの。アヤツで言つんだ  
よ」

喫茶店があ……

半年近く行ってないよなあ……

仕事終わった後も帰つてベットで「ダーライブ。  
たまの休みもベットで「プロ、プロ……

……これがワークホリックってやつなのか！？  
いや、休日のオッサンか……

「ついたよ。」

変なこと考えつづけに到着してたよ。  
この件を考えるのは後だな……

「えっと、静かにね。まだお父さんたち起きあつたは起きてると悪いから……」

「10分な時間まで、何処にお出かけだ？」

驚いて振り向くと見た田一郎、9時頃このお兄さんが腕組みをして  
仁王立ちしていた。

にしてもムダにイケメンじゃねえかこの兄ちゃん……

「お兄ちゃん……？」

なのはのお兄さんでしたよ。

そしてその兄ちゃんがゆっくと俺の方を向き、疑問をもつた顔で

「なのは、この男の子は誰なんだ？」

訪ねるのは良いんですが

なんだか殺氣だつてませんかあああああ！？

「えっと、その……。お友だちのナオトくんです。」

なのほ、わいまでじもつたり信憑性がなくなるでしょー！？

この兄ちゃん今にも俺に襲いかかろうとしてるやうな感じおー！？

「よくも……」

あれなんか、嫌な予感が……

「よくもなのはほりんな時間まで連れまわしてくれたな。覚悟はで  
きてるか？」

冷静に言つてゐるやつに聞こえるだらうが、殺氣はバンバン飛んでき  
て冷や汗がとまんねえんだよおおおおおおおお！？

「せんとうにすこませんべつたああーーー！」

.....

.....

というわけです。

そして土下座中の俺に小太刀のよなもで襲いかかろうとする、  
なのはの兄ちゃんをなのはが必死に止めている.....

俺、明日まで生きてるかな.....

「あつかわいい　なのはは」の子のことが心配で出掛けたのかな  
? ?

それとも~、この男の子に会いにいったのかなあ？」

いきなり現れてニヤニヤしながら話しかけきた姉ちゃん、つかこの  
人も綺麗な人だな。

.....誰?

「お姉ちゃん!/?そそそそなんじゃ、なつないの!/?」

なのはの姉ちゃんでしたか  
この兄妹スペック高いな。.....そういえば家の兄貴もイケメン  
だよなあ

おれっ?

普通だよ、普通。

悪くはないと思つたが……  
誰に叫つてんだ？おれ？

「まあまあ恭介ちゃん。まずは中に入つてお話を聞いりつか。なのにも  
君も良こよね？」

「はー……それでお願いしますーー。」

あいつがヒーリングを、なのはの姉ちゃん……  
正直この状況は耐えられません。

「お父さんたちも起きてるしね。」

ああ、尋問されるんですね……

どうしよう、魔法はできる限り秘密にしてなきゃないし。

でも、どうやらクロノに怒られるよなあ……

「ナオトくん？入らないの？」

「あひひ、今行く。」

わ、ビックリしたかな……



## episode 3 (後書き)

今年最後の投稿でした！！  
短いけど……

来年もよろしくお願ひします？

なのはの家に入りました。

殺氣を俺に向けて放つのはの兄ちゃんに案内される部屋のドアを開けて

「今、父さんを呼んでくるから。君は居間で待つてくれ。」

とか言ってる間も俺への殺意は收まりません。

俺のライフはもうゼロです！

おれ、一  
とこだて聞いがことかある乞言がな

「アーニーか、お嬢様の母さん、アーニー。」

そういえば自己紹介してなかつたね、俺。

「ナオトです。ナオト・ヴァンクルです。」

「ナオトくんね。私は高町みゆき、なのはのお姉ちゃんです。」

「 よろしくお願いします。みゆちゃん。」

みゆきさんに案内され部屋の中に入ると

「あら? どうしたの? みゆき、なのは。そっちの野の子は?」女神がいた。

「一万里と一千年前から愛してましたあああーーー！」

「うわーー行けなつづいたの？ナオト君ーー？」

みゆきさんがビックリしてるけど関係ないねーーー  
目の前の女性が女神に見えるよ。

薄い茶色のロングヘアーとか優しげな雰囲気とか  
美人だけど綺麗系じゃなく可愛い系に部類されるとことか  
俺のタイプは年上ですーーー

「ははー。いきなり桃子を口説くとはなかなか見所があるなーでも  
桃子は俺の妻だからな。」

「お母さんナオトくんが昔泣いてるの。……」

えつ……妻……お母さんーー?

「そんな……ヒドイ……  
ズシャ……

「また膝から崩れ落ちたのーー？」

「よつぽジショックだつたんだな。」

なのはとなのはの兄ちゃんがなんか言つてるけどわかんないわあ  
むづびげんもならんとするでーーーわす

……  
……  
……  
……

「わたくしは取り乱してすいませんでした……」

「落ち着いたかい？」

もちろん落ち着きましたよ。

妻、お母さん発言で冷水どころか液化窒素がかけられましたしそれから意識を取り戻して田口紹介をして、今まさに尋問をされています。

「さて、率直に聞こいつか。ナオト君。なのは。どうしてこんな時間まで、いや、なのはがどうしてこんな時間に出掛けたのかききたいんだが。」

「さて、どうよつかな……

話を切り出した土郎さんと桃子さんは表情からは何を考えているかはわからない、ってか読めない。

それと引き換え恭也さんとみゆきさんは「あらが嘘をつかないか、見極めようとしている。

本当にどうしようか……

正直に言つてこの世界は管理外世界で名前は地球と言つりし。

前世の故郷に会えたのは嬉しいが大事なのは、この世界に魔法が存在しないことだ

いや……探せば出てくるかもしれないけど……

本来、管理外世界の人間、世界には、こちらの魔法を認知されるのは良いことではない。正直、自分が知らない知識など人間は信じようとはしないし、それが魔法のない世界なら頭がおかしくなったと救急車を呼ばれてしまつだらう。

『ユーノ。どうしようかな?』

『やうだね……』

『俺としては正直に話してなのはの協力を得たいところなんだけど。』

『

『えつーへどうして?』

『まず第一に……俺は封印魔法があまり上手くない、ってかロストロギアを封印するのには魔力が足りなすぎる。なのはを極力戦わせずに封印だけでも良いから手伝つてもらえると回収率も上がるしな。』

『

『なつなるほど……』

『一つ目は魔法を知つてしまつた以上、こちら側の田の畠へといろにおいとかないと……。なのはの場合はあいつ一人でも探し出せうとするかもしれないし。』

『ナオトって意外と考えてるんだね。』

『ユーノ、あとで握りつぶしてやるからな。』

まつ、ユーノにも話しさ通したし、協力を養成しちゃいますか。

えつと、切り出しかたはできるだけ真面目に

「土郎さん、桃子さん、恭也さん、みゆきさん。魔法つてしってますか？」

僕は魔法使いなんです。」

「恭也、救急車つて何番だったかな？」

「親父、警察の方がよくないか？」

言つてたことが現実になりかけてますねえ……  
でも真面目に話して協力を得ないとな。  
浮きながら。

「本当に魔法使いなんです。その証拠に、ほら。」

魔力球をだして高町家の面々の周りを不規則に飛ばしてみる。宙に浮きながら。

「これは驚いたな！？」

「本当に魔法使いなのねえ。」

「これを見せられたら信じるしかないだろ。」

「わあ、速いな。」の光……

「魔法つてこんな」ともできるんだあ……

受けは上々のようだナビ話を続けなきゃな

「これで僕が魔法使いだって言つのは信じてもうましたか？」

「空中に浮いたまま、不思議な光を飛ばせば信じられないな。」

ありがとうござます。十郎さん。

「でも君が魔法使いなのと、なのはが夜遅くに家を飛び出したのは関係があるのか？」

恭也さんは鋭いな。関係があるってことにして遠回しに聞いてくる。

俺より執務面の才能有るんじゃね？

「なのは?どうして家を飛び出していったの?」

「あのね、お姉ちゃん。声が聴こえたの。」

「魔力のない一般人には聞こえないんだって……  
それじゃ説明にならないから……

「声だつて……？」

なのは意外の高町家の面々は訳がわからない。って顔してんだよなあ。

んでもなのはが家を飛び出した理由は俺は詳しくはわからないし……

「それは僕から説明します。」

ナイスだユーノ。

俺のわからないこといろいろを皆に説明してくれ！！

なるほど。

要するに

ユーノがピンチになる

誰か助けて～（思念）

なのは「私にまかせろーーー！」

つてことかな。

えつ？はしょりすぎ？

つまつせなのはがコーーの思念を聞こえていてもたつてもこられなく  
はひじかせこえむひしゃいばん。

まあ、高町家の皆さんに協力してくれ！！

つて言つのは俺なんだろ。

さつきの話ででなかつたから

「よくわかった。ナオト君、まだなにか言いたいようだがなにかな？」

鋭すぎです、士郎さん。

「ええ、本題に入ります。なのはさんにはロストロギアの回収を手伝つていただきたいんです。」

「家のなのはに手伝えることがあるのかい?」  
土郎さん。娘が心配なのはわかりますが……

おお！？ もおおすいし威圧するの抑えてもらつていただきたいんですけどお

なにこの人のオーラ!?

絶対、裏の仕事してた経験あるでしょ士郎さん！？

「土郎さん。あんまりプレッシャーかけちゃダメですよ。」

「桃子！？すつすまん？」

桃子さん

綺麗な笑顔の後に鬼がみました……  
とりあえず土郎さんの質問に答えるか……

「十分すぎるくらい戦力になります。先ほどコーンが話した内容に  
関係があるのですが。」

「願いを叶える石、ジュエルシードだつたつけ？  
その石に関係していくるのかな？」

みゆきさんが話の内容を思い出しながら聞いてきてるけど  
恭也さんも頷いてる。

本当にこの家の人は刀が鋭いねえ……

「ふえ！？ なつなに？ ナオトくん。」

なのははダメだけどな。

「はい、みゆきさんが言つたようにジュエルシード。僕たちの世界  
ではそれらの様なものを総括してロストロギアと呼んでいます。」

なのははがなにか感づいて

「今、すごくバカにされたのーー？」

とか言つてるが。

何でこんなとこだけ勘が冴えてるんだよ……  
無視だ、無視。

「ジュエルシードが暴走した場合に再度封印をかけなくてはなら  
いんですけど……」

俺の場合、魔力の絶対数が足りてないんですよ。」

そうなのよねえ……

俺の魔力ランクはギリギリA。

さらに封印魔法に適正がないから使えることには使えるんだが、さ  
すがにロストロギアを封印するのはほぼ不可能に近い。

「なのはさんの魔力はこちらの世界でも全体で5%しかない、おそらくAAクラス以上だと思います。」

なのはから感じる魔力量は低く見積もってもAA以上はある。  
しかもユーノの助けがあったからといって  
始めてで、しかも一人で暴走体を封印したと言つことは確実に魔法  
を扱うセンスも持っている……。

「なのは。そして高町家の皆さん、俺たちに協力してください。」

これでダメなら俺とユーノだけで探さなきゃならないから絶対過労死するわ……

「なのは。なのはの考えを聞かせてくれるか?」

「……私は、まだわかんない。」

うつむいたまま士郎さんの問いかに答えるかなの  
れつきの話を聞けば迷うのも当然か……

「……でも私に何か出来るならナオトくんやユーノくんを助けてあげたい。」

「そうか。」

なのはの答えを聞いたあと土郎さんは俺らの方を向いて

「なのはの意志が君たちの助けになりたいと言つてはいるなら俺は止めたりはしない。」

土郎さん……

かつかけえええ……

俺もこんなナイスミドルになりたいですよ……

「ただ一つ聞きたいんだが、私たちは協力出来ないのかな?」

「バックアップくらいにしかならないと思います。」

「ちょっとーー?ナオトーー?」

「ユーノ。事実だろ?」

「俺らじゃ力不足だと言つのか?」

「はい。恭也さん達が一般の人たちを越えているのはわかります。でもその力はジュエルシードには通用しないです。」

「そうか……。ならなのはや君達を補助させてもらひつよ。出来れば力になりたいんだがな。」

本当に良い人達だな。

優しい人達なんだ。

「恭也さん。その気持ちだけで十分です。」

⋮ ⋮ ⋮

「じゃあこの話はおしまい。みんなお腹空かない？」

「おいおい桃子。夕飯は食べたんだから程々な。ナオトくんや」「一ノくんも食べていくかい?」

「 いただきますー！」

「僕もご馳走になります」

桃子さんのご飯が食べられるなんて

ご飯で思い出したけど俺とユーノって何処に住めば良いの？

「?.どうしたの?ナオト君?」

「なつなんでもないですよ、みゆわれよ。」

とりあえず桃子さんのご飯をいただくのが先だな

.....የተሸጠና ስራውን ተስትሮ

## episode 4 (後書き)

唐突ですがアンケートです。

ナオトのレアスキルを投票で決めてもらいたいと思いますーー！

この中から「これ使つてくれや。」的なのを選んで感想に書き込んでくださいーー！

?ペルソナの印還

?THE カード BirthdaysのアヤブレアのOD  
オーバーダイブ

?相手の魔法を数回だけはねかえすバリア（技名はあとで考えます。  
）

この中から選んでください

締め切りは1月31日まで？

んでは臨みとノシ

episode 5

………… もの。

皆さん。

おはようございます。

こんにちわ。

こんばんは。

今から寝る人にはおやすみなさい。

私、ナオト・ヴァンクル

九歳

ちなみに独身よろしくね

つて何処かの極道な先生の様に自己紹介しないと今の状況に心が負けそなんです……

なぜかつて?

それは…………

「なのはさあああん！？」

早く起動して封印してくれないいい！？」

「ガルル！－ガルガルル！－」

ただいま目が沢山ある犬しきモノに食われそุดからです！？

「あんなに長い言葉覚えてないよお！？」

「クソ役たたないじゃねえかよ！？」

誰か助けてええ！

Help meeeeeeeeee!

時間は少し遡ってコーカサスの山脈を越えてアゼルバイジャンの首都バクーへ

なし崩し的に高町家に住むことになりました。

簡単に言つてしまえばそれまでだが……

ご飯を食べた後に俺とコーノが住む場所がないって事を高町家の皆さんに話したら

「あら！？ならナオト君の上司さんが来るまで家に居候する？」

「良いじゃないか。ナオト君、ユーノ君そうしない？」  
などと十郎さんが乗つかつて来てしました。

ちなみに恭也さんやみゆさんも頷いてたし……

んでもつて次の日。

朝一でこの町の晩飯を食べて

士郎さんと桃子さんにお仕事の喫茶店へ  
恭也さん、みゆきさん、なのははそれぞれの学校へ向かいました。

俺つ！？

オレとゴーノはお隣行番ですよ~

一応昨日の怪我も治つてないでしょ。

『なつナオトくん。聞こえる？』

まあのには昨日の説明の他に細かい所まで確認するために

『大丈夫。聴こえてるから。ユーノも聴こえてるか?』

『こつちも大丈夫だよ。』

思念は使つてゐんですがね。

.....  
それにしても

『…………で、ジュエルシードは単体でも危険なんだ。』

『 そ う な ん だ 。 』

なのはつて魔法と出会いつてまだ一日も経つてないよな……  
なんで普通に思念返せんだよ……

魔法の才能ありすぎじゃね~

「ナオト。説明終わつたけど。」

「と、ユーノがこれからどうある?」と聞いてきたので

「午前中は大事をとるために体を休めて午後からこの辺の地理の確認もかねてジユエルシードを探す。こんなところで良い?」

「やうだね。まずは体を休めようよ。」

それじゃ午後まで寝ましょうかね……。

ヒィィィィィン

「ナオト! ?」

うん、寝ても田が覚めるほど魔力のうねりだね……。

十中八九ジユエルシードが発動したんだろうねえ……。  
にしても昨日の今日で頻繁に発動しそぎだろ  
この町……呪われているんだろつか……。

「とりあえずなのはに連絡とつて。俺たちは発動場所に向かうわ。」

「これはまた……」

「す、いね……現住生物を取り込んでる。実態がある分、昨日の奴より数段強いよ……」

ジユエルシードが発動した場所に向かうと倒れてる女人の人と明らかに犬ではないが犬らしき田<sup>た</sup>がたくさんある生き物が唸つっていました……

「ナオトくん、ユーノくん……つてなにあれー？」

なのはも到着してすぐに暴走体に気づいて驚いてるけど、何つて聞かれたら

「犬っぽいもの。田<sup>た</sup>がたくさんあるけど。」

「確かにたくさんある…………

つて、そんな」と言つてる場合じやないのー?早く封印しないとー!」

「「」わつともだ!」

セヒト……

「ユーノ。弱らせて封印まで持つてけばいいんだよな。」

つかそれ以外だと俺あんまり役に立たないかも

「そうだね。動きを止めてる所を封印するから……ナオト、お願いできる?」

「りょーかいだ!!」

「マスター。セットアップしますか?」

「あつ、お願いします。」

良し行くか

「S U 1、 s e t u p」

いつもどいつの機動隊の様なバリアジャケットだ。  
起動には問題ないみたいだな。

「ナオトのデバイスは拳銃型なんだ。ミドルレンジ専門なのかな?」

そつそつ、俺の愛機S U 1は拳銃が……たの……

「なんじゅーつやああああああああああー!?」

「どうされましたか？」

なんで！？ SU1は「」一般的な杖型のストレージデバイスだぞ！？

「ナオトくん!!? 圣獣が!!?

え？

ガルルルウウ！！

「襲つてきたり…………」

「早々言えよー？」

暴走体が飛び掛かってきて咄嗟にプロテクションを張て鍔迫り合い  
みたくなつてるけど

体制が俺が下で暴走体が上。

早くしないと無しかられる！－！

つかこの際S U 1か杖型から拳銃型になつてんのは氣にしねえ！！

「なのせれああんー?早く起動して封印していくなああああいー?  
?」

動きが止まつてゐる今なら封印できるからーー。  
ひやつひやと封印しよー?」

「えつえつと……えりせひつて起動するの?」

「はああああー?」

「なのは、じないだ書つた起動パスワードだよー?はい『我、使命  
を……』から始まるパスワードーー!」

「あんな長いの覚えてないよおー

「クソ役に立たないじやねえかーー!」

「ああ、不味い……  
疲れてきた……

「ナホトー?」

「ナホトくそー?」

ナオトくんを助けなきゃー！？  
でもビザアッて……

> m a s t e r , p l e a s e c a l l m y n a m e <

レイジングハートー？

> m a s t e r , p l e a s e c a l l m y n a m e <

わかったよレイジングハートー！！

「レイジングハート、セットアップー！」

> o k s t a n d b y r e a d y s e t u p <

「！？ 起動パスワード無しでー！？」

「ありえねえ……」

私を包んでいた光が消えると昨日と同じ服装に魔法の杖を左手に握っていた

「ありがとう レイジングハート」

^ please don't worry ^

良し、ナオトくんを助けるためにも早く封印しなきゃ!!

.....

.....

.....

.....

なのはの奴、起動パワード無しでデバイスを起動させやがった!?

マジかよ.....

そのパワード無しの起動にいくには訓練をつけるか、インテリジ  
エンステバイスならデバイスとのシンクロ率が高いかしかないんだ  
が.....

多分、後者なんだろ、って暴走体の攻撃が厳しくなつてきやがつた

!?

「なのはああああー!?早く封印してくれーーー！」

「うん、レイジングハート。」

^ seeeing mode set up ^

「リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル??。封印ーーー！」

.....

.....

.....

.....

ふいー(、ーーー)

なんとか封印して回収したけどヤバかったな.....

^ そうですね。マスター役たたずでしたもんね。^

「八割がたお前のせいですけどねええー!?」

「ナオト、落ち着きなよ。」

ああ悪いなゴー。  
それにして

「なんで拳銃になつてんの？お前。」

「私のプログラムに多少なりとも変化があつたのか。起動を開始して完了したら」の形になつていきました。」

「お前もわかんないのかよ。……」

はああ  
……

八方塞がりじやねえかよ  
……

「とつとこかく！――三つ田も封印出来たんだし、ナオトも元気だしなよ。後で一緒にメンテナンスしてみようよ。」

「そうだな……」

ゴーはデバイスのメンテナンスも出来るのか。  
助かるわあ。俺のメンテナンスは汚れとつたりとか細かいプログラムの調整くらいしか出来ないしな。

「じゃあ家に帰ろつ ナオトくん、ゴーくん。」

「せうだな……」

報告書

とつあえず、一度目の封印も色々あつたが無事に封印を完了。  
SFC-1がなぜ拳銃型に変化していたかはいまだ不明。  
現地協力者、高町なのはの魔法の才能は異常だと思ひ……

こんな感じだ。

はああ  
……

たつた2日しか経つてないのに「いつもロストロギアが発動してる」。  
海でもありますねえだろ……

「ナオトくん。」飯だつてえ

「あこよ。いまく〜

まあこの町の人たちはみんないい人そつだし

「できる限りのことはやりますかねーー！」

「私も手伝いますよ、マスター。」

「頼むぜ、SFC-1。」

「ナホトヘルーんーー！」

「今こいつのーー。」

先ずは桃子さんのウマウマい飯だな

……

……

……

……

この時、神社での出来事を誰かに見られてたなんて、俺は気づいて  
いなかつたんです……

## episode 5 (後書き)

アンケートの投稿ありがとうございました。

また何かしらあつたら、随時お手伝いお願いします

episode 6 前（前書き）

感想くだされると嬉しいです

高町なのはは魔法少女である。

しかし彼女にも一般人の生活あり、今は自身が通う聖祥大付属小学校でいつも三人組でお昼ご飯を食べている最中だった。

「なのはー！聞いてるなのはー！」

「うん。聞こえてるよ。アリサちゃん。」

「ほう」としている様に見えたのかアリサ・バーニングスがなのはに少し強めの口調で聞き

それになのはは”そんなに大きな声出さなくてもなあ”と心の中で思いながらも口にはせず”明日の予定でしょ。”と確認するとそれに満足したのかアリサは言葉を続け

「そりよ。明日のサッカーの試合を見に行く話なんだけど、現地に直接集合ね。すずかもそれでいい？」

「うん。私もそれでいいよ。」

アリサの言葉に最後の一人の月村すずかが返した。

アリサが言っている試合とは高町士郎が監督するサッカーチームの練習試合である。

明日行われるサッカーチームの練習試合には達三人組が招待され、“応援してくれないか。”と士郎からお願いされたのでそれならばとその時の予定をアリサが立て、内容の確認をしていた。そんな中その三人組に話しかける影があった

「なのは、アリサ、すずか、明日の試合見に来るんだろ！俺お前らのためにがんばるから俺を応援してくれよ。」

「あつうん。がんばってね。新一くん。」

彼の名前は大崎新一。

なのは達のクラスメイトである。なのはは”新一くんがいるからいかないかな”と心の中で毒をついているのだがそんなこと口にできるはずもなく

「それじゃーまたな！」

「はいはい。」

「それじゃあね。」

新一が屋上からいなくなるとなのはが大きくため息を吐いて

「はあ……」

「なのはも大変ね。あいつから話しかけられるなんて。」

「ははは、悪い人ではないんだけどね。」

「すずか。あいつがいないんだから正直言つていいのよ……気持ち悪い」と……。

その言葉になのはとすずかはさすがに苦笑いだつたが悪い当たるところが新一には沢山あるので反論はしなかつた

「そもそも新一君は今の言葉、いろんな女の子に言つてたよ。」

「その時点であつえないわよね……。顔は悪いわけではないのにね。」

すずかとアリサの会話を聞きながらのはは“それ以前に生理的に受け付けないんだよねえ……”と考える。

「まあ、あいつの話はやめましょ。」飯がまずくなるわ……。

その言葉にまた二人は苦笑いしかできなかつた。

「もうだーしないだのフューレット、コーノだけ? 今日、なのはの家に見に行きたいんだけど。」

「あつー・うだね。初めて見つけたときから会つてないもんね。」

「いいよーー今田家に……! ?」

言いかけたときになのはは気づいた。“アリサちゃんとすずかちや

んを家につれて来ていいのかな？”と

以前なら”来ていいよ。”とすぐに返していたのだが現在家にはナオトがいるのだ。

ユーノは良い。家で飼うと以前言っていたから。だがナオトだ。ナオトがただの居候なら喜んで紹介するのだが、なにぶん魔法とう未知をつかう人間なので簡単にあわせて良いのかとなのはは迷つた。

”あとでナオトくん達に確認とつてみよう。”

「あつと、今日は駄目なんだ……。『めんね。』

「なんか用事でもあるの？」

「うつうん。」

「そつか。じゃあまた今度だね。」

心の中でアリサたちに謝罪をしながら言葉を返す。

「あつー？ 昼休み終わりそつよー？ 急いで食べちやこましょー！」

アリサの声で三人は残りのお弁当を食べ始めた。

” そういえばナオトくん達って何してるんだろ？ ”  
そんな疑問がなのはに浮いてきた昼時だつた。

：

なのは達に声をかけた。

これでまた俺の勇士をあいつらに見せ付けてハーレムを形成していくんだぜ。

俺、大崎新一は転生者だ。

前世はテンプレの「」とくトラックにひかれて鬱生やした爺さんの神様に

「なのはの世界に転生させてあげる。一個能力あげるし。」

とか言われて能力は英靈エミヤの無限の剣聖も貰つたしww

魔力もこの時点でAAAあるしいww

正直楽勝じゃね。とか思つてたんだが……

神社のときから介入しようとして（ユーノの時は寝てて気づかなかつた）向かつたら……

誰かもう介入していやがつた！！

顔は見えなかつたがあの場面に男のキャラは居なかつたし100%

転生者だ！！

次にあつたらいや

「ハーレムの邪魔するなら……やつてやるか？」

とりあえず会つてみてからだな。正直チートな俺なら楽勝でしょww

www

”また大崎なんか言つてるわ”

”気持ち悪いよね。顔はまあまあのにねえ”

”ああ言つのを『残念なイケメン』て言つのよね。”

おつとー女の子達がじつちを見てなんか言つてるぜ。

あつと俺のことが好きなんだな　ｗｗ  
とりあえず笑顔と手を振つとか  
一々一々一々ふりふり

”イヤー！？”

”やつぱり気持ち悪い！？”

”ギヤー”

キヤーキヤー言いながらいつちやた。

照れなぐてもいいのに　ｗｗ

よし、もう少しだけハイタッチも出していくし、早めにのは達を  
攻略しないとな！！

：

：

：

なんか……、なのはにバカにされた気が……  
まつこいや。せ

「いりりしゃいませえ！」

あつー今俺が何をしてくるかといつと

「あらあ、高町さん。新しいバイトのことは小町のねえ。」

「ははつ、ナオト君は家にホームステイしたことありますよ。」

「ナゾコヤでお手伝い中ですよ。」

いやあ、さすがに何もせずに我が家にやっかいになるのはさすがの俺  
としても悪いなあと感じますわよ。

んで、そのことを士郎さん達に話したら、『ならナゾコヤをお手伝いして  
くれないかな』と言われれば手伝いますよ、ふつづく。

一応前世でも喫茶店のバイトは経験したことがあったのでそれが生  
きてこるようですが

「じゃあナオト君のおすすめいただいくつかしら。」

「あつそれでしたら……」

カラソーロン

常連の尾島さんに俺のおすすめを提供して今入ってきたお客様さんに  
『こりつしゃいません』とお決まりの訛詞を言い席まで案内して  
カラソーロン

「こりつしゃこません」

ずいぶん混んりますね……

接客大変だ。

お店が一段落してから士郎さんがそういえばと

「ナオト君、明日なんだがサッカーの試合に出てくれないかな？つとサッカーは知っているかな。」

と言つてきました。

サッカーですか知つていてるかと聞かれれば

「知つていますよ。でもその試合に俺なんかが出ても良いんですか？」

「ああ。人数は足りてるんだがティフェンスの子が一人足りないんだ。皆点数に絡むところをやりたがるからね……。」

まあ小学生くらいだとフォアードやミッドフィルダーやりたがりますよね。

カツコヨク見えるのはやっぱりその辺だからね。  
断る理由もないし

「わかりました。参加させてもらいます。」

「ありがとうございました。じゃお店が終わったらユーフォームとか予定を確認するから。」

カラントロン

おつと、第一陣が始まりましたね。

「じゃあ後で。」

「はー。つと、こいつしゃいます。喫茶//アコヤ//ヒルズ。」

さて、お仕事を再開しますかね。

⋮⋮⋮..

次の日になつてさて、来ましたよ河川敷グラウンド。え！？ 昨日の夜は何があつたって？

とうあえず今日のジュエルシード探索は休みにして。なんか、なのはが”友達を連れてきて紹介して良いの？”と聞いてきたので”いいんじやね。一応高町家にホームステイすることになつてるし”

と返したのに

”きいてないよー！” ”言ひてないもん。”

と一悶着して、コーノが俺らを止めたくらいだから。よし。解説中にアップ終了！-

アップを済ませて士郎さんのといふへ集合したひびき話があるらしい

試合前のマーティングと俺の紹介だらうねえ……

「みんな聞いてくれ！今日の練習試合からチームに参加するナオト・ヴァンクル君だ。ポジションはティフエンダーで今日の試合でも出場してもらつから皆仲良くな！」

士郎さんが俺の紹介を終え、周りの子達が”よろしく”とか”今日は勝とうぜ！！”とか言ってくれて歓迎ムードの中一人納得の言つていない顔の男の子が士郎さんに質問した

「士郎さん、そいつ士郎さんの知り合いでですか？」

「そうだよ大崎君。彼は家にホームステイ中なんだ。それでサッカーエンペラーリー経験があるらしいから参加してもらつたんだよ。」

質問した大崎？つて奴が士郎さんの答えを聞いた瞬間顔を歪めて俺を見んできた。

ええ！？俺なんか君にしたか！？  
なんか”いや……やつぱ……”いつ……転……者……なら……やらな……”  
とかブツブツ言つてるし  
こわっ！？なんか家の兄貴を連想させるぞ”いつ……”

「えつとさ、俺に何か用？」

とつあえずなんとか”いい”ケーションがどれか確認してみるのが一番だろ。

「くつそ……する。な……の……居候なんつり……ん……ある。」

うん。駄目だコイツ。ほつといつ。

「さあ、相手の準備もできたみたいだから試合を始めるぞ。みんな並べ。」

試合開始するみたいですねえ。まあ来たボールをとつて味方に渡しつければ大丈夫だろ。

とか考へてるとなんか女の子達の叫ぶ声が聞こえた

「あんたたち！…応援するんだから絶対勝ちなさいよおーー！」

「がんばってえー！」

金髪と濃い青色の髪の子が応援していた。  
誰かの知り合いかな

「アリサあーすずかあ！俺のために応援ありがとう。」

ありや、さつきの大崎君の知り合いじゃねえか。  
まあ言動がアホの子でも顔はかつこいい部類だからもてるのかな。

「新一以外がんばれえーー！」

「怪我しないようにねーー新一君以外。」

「二人ともツンデレだなあ〜〜」

ええええーー今のじう考へても好意の裏返しじゃねえだろおおーー？

周りの奴らも

”でたよ、新一の勘違い。”

”サッカーはある程度上手くても友達になりたくない理由はこれだよなあ”

とか言つてんのこ氣づかねえとか  
参め過ぎる.....

P*i*  
i  
i  
i  
i  
i  
i  
i  
i  
i  
!

とかやつてゐるつひに試合始まつたじゃねえかよー！？

episode 6 前（後書き）

完成しきれんかった……

早く金髪ツインテ天然の子を出したい……。

あつ感想くださると小説の更新が早くなります（ - ）キラリ

モチベーションがあがるんですよね!!

今まで感想くれてた方々も引き続きヨロシクお願いしますー!!

episode 6 後（前書き）

感想が力に変わります。

被災地の宮城県民、そして私に力を！！

さて。試合はというと前半終わって0対0のままハーフタイム中です。

試合内容はこちらがかなり不利。支配率30もいつてないと思つ。こんな試合になつてる原因はというと……

「まつたく。みんなして俺の足を引っ張つて……。後半は俺にボール集めろよ。」

大崎の野郎です。

こいつボールをとると自分だけで攻めようとして駆け上がっていくんですよね、ミッドフィルダーなのに。

いやね、攻めてダメな訳じやないんですが……

こいつが抜けたところに人を裂く余裕がないんですよ。

ぶつちやけ前半で一人退場をくらつて10人で試合してるんで。

でもね……

大崎が一人で持つていつて決めてくるなら俺も何も言いませんよ、ええ言ひませんとも。

だけどこいつ、あらうことかボールとられてカウンターくらうんですよ！？

うちのチームのキーパーがかなりナイスセーブを繰り返したから点数にならなかつたんだけど。

「大崎くん。ポジション交代だ。」

ほら見かねて士郎さんが交代させたみたいだし。

確かに小学生の中では運動神経ある方みたいだけどチームの輪を乱したら本末転倒だしな。

「ナオトくん。ミッドフィルダー出来るかな？」

「はい！？」

何でオレ！？他にも出来そうな奴いつぱいいるじゃないですか！？

いや！？周りの奴等も

”確かにナオトなら”

みたいな反応しないでええええ！？

ぶっちゃけオレなんもしてないから！？

「なにいつてんだ？お前がいなきゃキーパーのナイスセーブもなかつただる。」

「いや、忠和。買い被りすぎだから……」

試合中に仲良くなつた風間忠和にオレは言つ。全くなにいつてんだ！？

「忠和くんの言つ通り。ナオトくんは敵の動きを見てシュートコースを潰してゐる。ナオトくん、実は経験者だろ？？」

……

士郎さん！？

確かに相手がシューート打ちそつた場所に足出したりはしましたけど

「ちょっと待つた！！俺以上にミッドフィルダー出来る奴なんてこ

のチームにいないし、なおかつ「イツにはやらせたくねえ……」

うん、少し黙ろうか、大崎くん。

「わかりました。やります。」

「何かつてに決めてんだ……！」

俺が了承したのを聞いたとたんに大崎が怒鳴るような声で俺に詰め寄つて来た。

声デカイから！？耳がキーンてなつたから！？

「大崎くん。ポジションを下げるだけで良いんだ。もし、それが嫌なら交代しかない。」

「ウフー！？」

おおー！土郎さんの凄みのきいた声で言われて大崎もビビッちまつたみたいだな。

「さて。もう試合も再開するから気合を入れて勝ちにいこう！……後半頑張るぞー！」

”おおー！”と踏で声を出しフィールドへ向かう……おうとしたときに大崎から俺に声がかかる。

「お前。ミスしろ。」

はつ？何言つてんの「イツ？」

「お前がミスすれば俺がまたミッドフィルダーに戻れるからな。」

………… 小学生でこの考え方………… 救いようがないな。  
答えは決まってる。

「精神科にでも行きな。頭の中腐ってるよ。」

「つー? なんだと、俺の言つことが

「きけるわけねえだろ。黙つて後ろやつてる。」

はいはい、後ろでギヤー、ギヤー言つてゐるけどシカトシカトつと。  
ん? 忠和どうした?

「大変だな、お前……。」

ならかわれ。え? メンドイからヤダ。"  
だよね。

「それより。後半たのむぞ! ! 僕にショートチャンスくらい作つて  
くれよ。」

おお。良い笑顔!!

女の子とかだったら”キュン。はつこれが恋! ? ”とかになつそう  
な笑顔だねえ。イケメンになつて女の子泣かせになりそつだな……  
こいつ。

まあでも。

「はつ! ! チャンスドロロかハツトトロック決めさせたるわ! !

「なんなら、お前がきめちまえ。」

忠和。良い奴過ぎんだろ！？

「忠和の言ひとおつじや。ナオトがきめぢやれーーー。」

「玄間……いつの間！」……

「こつは玄間圭介。

玄間もさつき仲良くなつた一人だ。

「つか今まで何処に居たんだよ……」

「寝とつた！」

忠和の質問に簡単に答える玄間。ちなみにポジションはミッドフィルダーな。

「大崎の野郎。ワシへのバスもカットして自分で攻めちょうど前半はヒマでヒマでしうがなかつたんじや。ナオト。ワシにもまわせよーー！」

「はいはい。まかせとけ。」

”俺らにもまわせよーー。”

”後ろはまかせとけ。”

”ぜつてえ勝とうぜーー。”

皆やる気十分だし、さて後半戦。  
始めようかねーー！」

…………

…………

…………

……

のせーーなーーはーー

だれかが私を呼んでる。だれだろ。

「なのせーーもつ起きなこと」

やつだつた今田せーーつかひや そとあかひや そとねづれのチーム  
の応援にいかなきよ……

「ハーケー やしきしー……」

「ナホトからいの思念で前半終わつたつだつて。………… 遅刻だね。」

わあああー?

どうしきしー?

それも「れも昨日ナホトくふんと遊戯王やつて夜更かしこなかつたせ

いなの！

だつてナオトくん……

### 昨夜の高町家

『私の勝ちだね！！ブルーアイズでダイレクトアタック！！』

『魔法の簡発動マジック・シンカー』

『うわーん！？また負けたのぉー！？』

『はっはっはあーー俺に単純ペートダウンで勝とうなんて五年早い  
わあーー』

『20戦全勝。なんでナオトはこんなに詳しいのや……』

つてことがあったの。

私のブルーアイズが負けるなんてあり得ないのーー！  
次こそわあ。

「なのはーー急がないとーー？」

！？

とにかく今はグラウンドにいかないとーー！

「すぐしたくするから……」

急がないと試合終わっちゃう。

……

……

……

……

「ほら！…パスパス…俺にまわせよ…！」

うつさいわ…！

ディフェンダーにわざわざバスまわすわけねーだろ…？  
相変わらず大崎が騒いでいるが後半戦も終盤に差し掛かつて以前0  
対0のまま。なんとかショートチャンスまでいくんだけど相手チ  
ームの固い守りに阻まれてる。

「ナオト…」うつむだ…！」

忠和…いいポジションにいるじゃないか…！  
こじは…！」

「忠和！…バス！…」

「よし！…大崎あがれ。そして俺の五メートル後ろにつけ。」

「はつはつはあ…やつぱり俺の力が必要だろ！…！」

「ちよつ！…忠和大崎上がらせたら！…」

「ナオトもこい！…」

「はい！…？」

「いいから！…」

そつ言つて忠和は走り出して相手をかわして行く。  
大崎はキチンと五メートル後ろについてるし。

「なんだかわかんないけど、とりあえず信じるからな忠和！…」

快調に相手デイフェンダーをかわしていた忠和だかついに囮まれた  
！？

「大崎！…」

そつ言つて大崎に向かつて

「ほら、よー！…」

とてつもないボールを大崎の

「よつしゅ、まかせ、うペツー?」

顔面にぶつけた……

「なにしどそじゅ……忠和。」

玄間、俺も同じこと思つた

そして大崎の顔面に当たつたボールが

「マジかよ……」

俺の前にワンバウンドした。

「ふつ。狙い通り!! ナオト打て!!」

確かに忠和と大崎に『ディフェンダー』が集まつて今ならフリーだ。  
つか、これ狙つてた忠和のセンス半端じゃなくないか!?

「させるか!」

ヤベ!?

相手の『ディフェンダー』が一人来ちました!?

ソイツのスライディングがボールの下をどうれて高く上がつちました!?

でもこの高さなら!!

「忠和が作ったチャンスを!..」

俺は高く飛び上がつて

「逃せるわけねえだろうがああああああああ！」

ボールを蹴りぬいた。

そのボールは相手のキー・パーの指をかすめて

P.i.i.i.i.i.i.i.!!

Pi'Pi'Pi'i!

「つしゃあーー！」

ゴールに突き刺さつた。

それと『悪魔の圖』終了の會

みんな！！決めたぞ……なに、みんなしてボカンとして。

そんな中で玄間が口を開いて

「ナオト、なんでオーバーヘッドキックができるんじゃ……決めないと  
は思っちゃるがまさか大技で決めるとは……」

^ ?

## オーバーヘッドキック？

（。 。 。 ; ）

確かに体勢崩れて飛んだから無理やりボール蹴りぬいたけど、まさかオーバーヘッドになつてるとは！？

「やつぱりお前最高だわ」

忠和もかなり機嫌良さげだし（。 。 。 ; ）

「両チーム整列！！早くしなさいーー！」

「とつとつあえず並ぼうぜ四番ーー！」

みどりやFCでの俺の初練習試合は俺もビックリの大技で終わっちゃつたのだった。

「ゴールをオーバーヘッドで決めちゅうとは、やっぱりナオトは面白いのよ」

「いや、だから偶然だつて玄間……」

「それにしても出来すぎなくらい完璧なオーバーヘッドだったぜ。まさにキャプテンつぶ」

「それ以上は言わないでおこつか忠和……」

仲良くなつた一人に絡まれてます。

ぶつちやけ酔つてんじやねえコイツらー？

「つか皆して頭たたいてくな、『こりあーー！』

いやチーム全員……一人を抜いて絡まれてます。  
いわく

”イギリスでもサッカーやつてんだろ？”とか

”今度俺にサッカー教えるよ！”とか

”ねえ、今どんな気持ち？ねえねえ、どんな気持ち？”とか

最後の奴はグーパンで沈めましたが……

ちなみに絡んでこない一人は

「いやあ、俺の活躍どうだつた？三人とも？」

「あいつまた女の子たちに絡んでるよ……」

「救いよつのないやつじやな……」

大崎……

女の子たち明らかに嫌がってんだろうが……なぜ気づかないんだよ……

「よし、助けに行くか……ナオトが。」

「なんでオレー!?」

嫌だよ~

あいつウザいし気持ち悪いし最悪なんだけど……忠和、無視ですか……

「皆そんな気持ちなんじゃ。」

「なんで心の声がわかつたんだよ、玄間!/?」

「とにかく行け。俺はゴメンだ。」

忠和!/?自分が嫌だからって人に押し付けやがったな!/?

「マジでいくの?」

皆でウンウンて頷いてるしさあ。

今日会ったばっかの俺に対する態度キツくない……

「果てしなく行きたくないが、行つてきます。ええ、行つてきますともーー！」

俺が動き出すのを眺して合掌して見送りやがつて……

『ナオト、この男の子早くなんとかして！？僕のこと握りつぶすう  
！？』

「大崎テメエ、ユーノ握つてんじゃねえ！」うあーーー！」

大崎の奴、なのは達に見えないようにユーノを握りつぶそつとして  
やがつた！？

「あつ、あんた、ゴール決めてたやつよね。」

「最後にスゴイショートしてた人だよ。アリサちゃん。」

「あん？ なにかようかい？ 金髪美少女。蒼髪美少女。」

大崎からユーノをぶんどつて大丈夫かと確認してたらなのはと一緒に  
に応援してた女の子たちが話しかけてきた。まあ言葉の通り二人とも  
可愛い訳だが……

「びしょっ！？……お世辞がうまいわね……。あんた、なのはの家  
にホームステイしてるんでしょ？」

「そうだよ。ナオト・ヴァンクル、9歳。イギリスから來ました。  
よろしく頼むね……お一人ともお名前は？」

「あたしはアリサ・バーングス。なのはと同級生よ。」

「私は月村すずか。私もなのはちゃんと同級生だよ。」

金髪がアリサで蒼髪がすずかね。

「てゅうか、ナオトはサッカーつまいのね。あたしテレビでしかあんなショート見たことなかつたから体が震えたわ！！」

「アリサちゃんの言つ通りですか」かつたよ……私、感動しちやつた

！――

「いや、あれ偶然なんですが……」

こちらの皆様も勘違いしますね……  
あんなん狙つてうてるわけないでしょ……  
……で。

「なのはさん何をそんなに怒つていらっしゃるのですか？」

明らかに『私、怒つてます』オーラが出てるなのはの方を向いて質問してみる。

「どうして試合に出てたのー？と言つたサッカーの試合行くなら起

こじてよー。」

いや起こせうとほしたんだよ。  
でもなのはの部屋に入つて起こしたら……

『なんぴとたりとも私の眠りを覚ますのはゐるやないの……』

とか言いながらレイジングハート向けられたら逃げますよね！？拳銃向けられた犯人の気持ちがわかりましたよ。

「そんなことしてないもん！？」

「したから起こせなかつたんだよ……コーカスもな。」

最後は小声で言いながらなのはを軽くあしらいながらアリサ達に「とにかく。今日は応援ありがと。やっぱり女の子の応援は力になるからね」

実際チームのみんなもギャラリーの声にかなり反応してたしねえ

「当然よ……私達が応援して負けるなんて許さないんだから……！」

「あはは、しあわせそありがとうございました。ナオトくん。」

「まあ、なのはは力にすらならなかつたがな。」

「なんで……？」

いやねえ、遅れときといで……

「うわうわ。ちゃんと力になつたからそんなに拗ねんなよ。」

「むうう……」

「なのははつてこんなキャラだっけ？」

「あいつとナオトくんが弄るからじゃないかな。」のなのさちやんも  
可愛いけどね。」

ん?なんか2人とも言つたかな?

「おい。お前!—!」

あつ。そう言えば居たね。大崎が。

「俺を無視してなになのは達と話してんだ!—!」

いや、別にお前と話したくないし……

「新一!うるせーわよー!あっちの人たちと話してなさいよー!」

だつてよ。あっちの人たち。

ん?なに玄間?

”こ・つ・ち・こ・こ・セ・セ・ン・な。”

俺にこどりじりと畠つるだお前らは……

「そんなこと言つて、恥ずかしいんだろう、アリサはwww

「新一君。少し離れてくれないかな。」

すずか、言つね。

言葉にトゲが見え隠れしてゐるよ。

「新一くん。近くに来ないで欲しいの……」

ボソボソといつてゐるけど、なのは。

「 もう、みんなしてシンナーだなあ　wwwハイハイじや、あつちのモブ達と話して来るよ。なんかあつたら俺が助けるから呼ぶんだせ！ んじや、ノシ」

そいつで大崎は玄間達の方に向かつてつた。

忠和、玄間。御愁傷様。あいつらに向かつて合掌する。

れつきの仕返しじや、ウケケ

……それでも最後の方はなに言つてるかわからなかつたぞアイツ

「 なのはの話を聞いてなかつたのかしりっ！」

「 聽いててもわかんなかったんじやないかな。」

すずか、カラッとしたこといつね……

” ジリヤウセマでした”

おつとー

監禁してきたなー

「 足…今日は良くできた試合だつたぞ…また練習頑張つて、今度の大会も勝とうなー…」

” ハイー！”

“ ついやら解散みたいだな。よし、じゃあアコヤの手伝いの準備を、

つていだ！？

「じゃあな、ナオト。また今度遊びまづぜ。」

「忠和、頭叩きながり言ひついじやねえ、いだ！？」

「その通りじゃ。ワシリガ町を案内しちゃるーー楽しみにしつくん  
じゃなあ！！」

「玄間も……、叩くな、いだ、いだ、いたただだだ、みんなして帰  
り際に頭叩いてくんじやねえよ！？ いてえだろ！？」

” じゃな。今後遊ぼうぜーー！”

” サッカー教えてくれよ。期待してるからな”

” ねえねえどん、ゴメンふざけすぎた。だから拳握りしめて振り  
かぶらないで”

いろいろ言われたが最後は皆で笑って解散した。

つたく、頭腫れちまうだろうが。

ヒイン

「！？」

！？、なんだ今の感じ！？

「どうしたのなのは？」

アリサがユーノをなのはに返しながら聞く。  
つかユーノで遊んでたんかお前らは……

「ううん。なんでもないよ。」

でもなのはもなにか気づいたみたいだし確認しつく。

『なの……』

「じゃあ私達も解散？」

「やつしようか。」

「あつ皆午後から予定があるんだつけ。」

「お姉ちゃんとお出かけ」

「ハパとお買い物」

話しかけられる雰囲気じゃねえし……

「ナオトくん。今日は疲れただろうから店の手伝いはいいから、ゆつくり休みな。」

「あつはい。わかりました。」

士朗さんに言われて振り返りながら返事をした。

確かに鍛えてるからと言つても、あんだけ走り回ればダルくはなつてたからこの申し出はありがたい。

それに連日のジュエルシーード探しの疲れも抜けてないし体を休めなきゃないしな！

「女の子達も解散かい？」

「お父さん。」

「今日はお誘い頂きあつがといひやれこます。」

「試合、かつ」よかつたです。」

「ありがとう。既、迎えは来るのかい？ よかつたら送つてこいつか  
？」

「いえ、迎えに来てもらいますので。」

「同じくです。」

「やうかい。じゅあ氣をつけで。」

「またね また明日学校でね。」

「じゃあな。また機会があつたら。」

アリサ達が歩いて迎えが来るとこに向かっていった。  
にしても、すずかはかなり腹黒なんじや……

ゾクッ

なんか、殺氣が来たから考えるのをよそい……

「それじゃ、家に帰るか。お父さんせお風呂に入つてからお出で来るから。久しぶりに一緒にはこるか？なのぜ。」

「やハそんな年じやないもん。なのせセレクトマーなのー？」

「やんな体でレギュラーフィクシスだから睨むな、なのぜ。」

”次言つたら無ニル。”みたいな視線をなのはから抜けながらなのはの家に帰宅するべく歩き出した。

それにしても……

「わひ物の寂な感覚はなんだつたんだ……？」

「ナホトベヘン……卑く卑くへ」

「あつ今こくーーー。」

……氣のせこだつたり……いんだが……

……なんか忘れてるよつたな~

「なのは達帰つちまつた！？ぐそぐそ……『デート誘おうと思つたのに。まあ旨してシンデレだからな。』今日は木のジユエルシードだから準備してなのはを助けて、この大崎様への『レ』に持つていくぜ。』

彼はこの後母親に外出禁止をくらつたまだしらない。

episode 6 後(後書き)

震災のやうひ……

停電で書けんかつたやうひが……

地震、一度とくんな（#、日、）

## episode 7 (前書き)

皆様すこませんでした m (—) m

私は生きてこます m (—) m

報告があるので後書きみてください m (—) m

「ふわあ～」

バフッと顔をたててなのはがベッドに倒れ込む、でも

「なのは、寝るなら着替えないと」

着替えないと服にシワがついて大変だしね

「ん～」

そりそり服をぬいで！？

「あわわあわわあ

危ない危ない！？

なのはの着替えを見直すやダメだよボク！？

「ユーノくんもひと休みしといたほうがいいよ～

なのは！？話しかけられたよけに意識してやつからー！？

「なのはは晩御飯までおやすみなさい

バフッ

ふう、終わったみたいだな……  
それにも……

「やつぱり、なれない魔法を使うのは相当の疲労なんだろ?」

「ボクがもつとしつかりしてねば……」「

「なんて考えるだら」

「どうだよボクがしつかりしてねばなのはに迷惑かけるなん、て

「んな」「たひ」と思つたよ」

「なんでナオトがいるんだよー?」

えつー? てことは……

「ナオト、なのはの着替えを……」

だつたらまづこの世界の法的機関に連絡をして

「勘違いすんなよー? 返事がないから開けて確認しただけだから! ?」

「もしなのはが着替えてたりひつするのやー?」

「子供の着替えに興味なんてあるかあああー? 俺はロリコンじゅ  
あないつてのー?」

「年は同じくらいいだからロコータンプレックスじゃないとは思つけど……」

「正式名称で言わると途端に病気みたいな感じになるな……」

「ロコータンプレックスは病気だよー?」

「マジかよー?」

「まあ、それはさておき。ユーノ、そこまで責任を感じる必要はないぞ。実際話を聞いてみたがお前自身に非はないからな」

「こいつ自分一人で抱え込む癖みたいなのがあるからな、すこしガス抜きをせないと

「でも僕が怪我さえしなければなのはやナオトに迷惑かけることも

……

「またか……」りや重症だな

「いいかユーノ。なのははともかく俺に迷惑かけてるなんて思うな。

実際問題、俺は補助系の魔法が得意じゃない。お前やなのはがいないとジューエルシード一つ封印できない。ほら逆に俺の方が迷惑かけてるだろ?」

自分の立場はれっきとした社会人、しかも管理局員だ。この世界の公安と同じで俺はこの仕事で金もらってるし、生活している。なのに一般人の2人に捜査協力をたのんでる俺は迷惑どころか管理局的にもグレーゾーンだしな

「ナオト……でも……」

「別に気にするなとは言つてない。なのはに迷惑かけてるのは当たつてるしな…… ただそれは俺も同じだからな。そういう時はなのはに貸しを一つつけとくんだよ!—!」

「貸し……」

「そうだ、こいつが何かしたい。困ってる。その時に全力で助けてやれば良いんだよ!—! そうすりや貸し借りなしになる。つか貸しの貸し合いで続けるのが友達じゃねえのか? 俺はそう思うがな」

「貸しの貸し合いで……」

「深く考えんな。これは俺の結論だし、な……」

持論を相手に押し付けるのはクールじゃないしな……

街を歩く一人の男女

彼らはまだ12歳と小学校もでていなかった一人だった

「今日も凄かつたね」

「そんなことないよ、ほら、今日はナオトくんのおかげでティフェンスがしつかりしてたからね！」

不意に少女が男の子に話しかけるが、男の子はその言葉に照れた様子で答えた。

「でも、かつこよかつたあ……」

そう言われて男の子は照れて言葉がかえせずにただ微笑むことしかできず、それに気づいた少女も微笑みかえした。

「あつそつだーーー」

ふと少年はある」と思いだし少女に声をかける

「はー。」

「うわあ、綺麗！－」

「ただの石だとは思うんだけど、綺麗だつたから……」

少女が少年の手の上にある石を取りうとした瞬間  
その石が激しく輝き始めた

「えつうわああー！」

「さやあああー？」

この世界の人間が、道端に落ちている石が世界を破滅する力を持つ  
ているなどわかるはずもない  
奇しくもそれは2人の”ずっと一緒に居たいと言つ願い”によつて  
発動するとは皮肉なことであつた

全く、余計な」とまで言つちました……  
後で考えてみるとかなりハズイこと言つてたな

「ナオト、僕は僕なりになのはやナオトに借りを返せばいいんだね  
……僕の答えはまだでないけど、出たその時は！？！？」

つー？

「Jの反応は…？」

「連チャンでジコホールシード発動しそだろー？一度お祓いしても  
「らえよJの町…？」

ふさあ

「なのは…？」

「氣づいた…？」

「Jただけの魔力歪みだ…！氣づかないわけないだろ…！急ぐぞ！  
…」

いくら魔法使いはじめて数日でも魔力があるやつは誰でもわかるく  
らいの空氣の歪みだ、こりゃもしかしたら…

「うふー…せうだねナオト…く…ん…」

「なにやつてんだ…！早くしらつて…！」

「やうだよなのは…！急がないと…！」

口をパクパクさせて俺を指差しながらフリーズしてゐるのはに声を  
大きくして告げる

俺の勘はいつもは当てにならないが”嫌な予感”は外したことがな  
い…

本当にやこ

「なんでナオトくんが私部屋にいるの…？」

は？

こまやうじああー！？

「おと早へ出でつてよおーー？」

「んなあ、急げって言つてんだろがーー！」

「着替えるからでけえええええーー？」

「急いで階段をかけおりて出かけ用としたとき二十郎さんから声がかかる

「なんだあ？なのは、一緒にいるか？」

Hマーの具合から風呂場からのみのようですね  
つか、やつを断られたでしょう

「「」あさお父さん、なま達、ひょりじゆ座すしてやめます……。」

「俺とゴーノも一緒に心配しないでください……。」

「……まさかジコホールシードかい……。」

もつ齧したんですか！？

「なじきを付けて行つてきなさい……ナオトくん……なま達を頼んだよ……。」

「はこ……間に変えても守ります……。行つてきまわ……。」

「じやあ氣を付けて……。」

「……ま、子供の成長はませいなあ……俺も歳をとったもんだ……。」

「……」

なのまやゴーノと急いで高層ビルの屋上から街の様子を見ようと屋上まで駆け上がり

「レイジングハート……おねがい」

> stand by ready <

「なんでこんな時だけ足速いんだよ……ああもひ、ヒコーセットアツ  
ツブ！！」

> yes master set up <

わて、この現状は予想外だぞ

「酷い……」

「多分、人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持ったものが願  
いをこめて発動させたとき、ジユエルシードは一番強い力を發揮す  
るから。」

やつぱり俺の”悪い予感”が当たつてたか……  
こんな固有スキルはいらねえよバカ野郎が……

「あつー？」

「？ どうしたなのは？」

「やつぱりあのときの子が持つてたんだ……私、気づいてたはずな  
のに……」

なつー？

気がついてただと！？

ならあん時の違和感はジユエルシードで間違いなかつたのか！？

くせつたれ……

「気づいてたとかは後だ！！

「——！　呆けてないで結界はれ！！

「これ以上一般人に見られるのはマズイ。被害を押さえるためにも早く——！」

「そうだね！？今構築する……。」

そう言ひとゴーーはすぐに結界魔法の展開をした。

いつ見ても展開スピード、術式の精密さはAAA魔導師クラスだな。

「ゴーー！　ジユエルシードの位置はわかるか？」

「近くにあるのは感じるけど詳しい位置までは……。」

「近くにはあるんだな……  
なら、SUE——！」

↗了解ですマスターへ

「つー？　なつなんだと……。」

「どうしたのナオ……うわ……。」

「二人ともどう……なつなおとくんー？」

「詰つたな……言わないでくれ……。」

「でつでも…」

なんで、なんで

「なんでうじーがピロロハンマーになつてんだよおおおおおおおおお  
おー？」

「今回の原因もわかりませんね、諦めてくださいマスターへ

「ナオト君……ふつ。」

「なのは、てめえ後で裏にこいや……」

「ナオトーー今はそれどりうじやないからーー。」

「…? そうだつた…! 」

SU-1はおかしくても魔法を使うときの魔力の流れはいつも同じつ  
みたいだし展開はできるはずだ…!

「SU-1、エリシアサーチー！」

> area search <

「ナオトーー補助魔法苦手なんじやーー？」

ユーノが驚いてるようだが確かに俺は補助魔法が苦手だがサーチ系  
統の魔法は俺のレアスキルの関係上そいつの補助魔導師の上をいく  
んだな、なぜだか

「みつけたぜ！－南西方向の中心にみえる大木のてっぺんから5メートル下の枝の左側だ！－」

「そんな細かいところまで……」

「みつけただけだしあそこにいく方法がないんだよ－－」

不味い、一刻も早くしないとユーノの張った結界が破られちまう－？

「私にまかせて！－レイジングハート－－」

> yes master <

そんな八方塞がりのなかで一人？の声はよく響いて聞こえた……

## episode 7 (後書き)

活動報告にも書きましたが。

IISの小説を書こうかと……

m できたら yesかな。を感想かメッセージにくださいませ( )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3040o/>

---

リリカル転生記

2011年7月7日03時54分発行